

沖縄

「釜を唄」にはずいぶん沖縄「出身者」がいる。彼らは「本土人」を「ヤマトンチュー」と呼び、自らを「ウチナンチュー」と呼ぶ。

「ウチナンチュー」はよく彼らだけで集まり、路上でもよく酒盛りをしている。又、よくケニカをしているのも見かける。そのため

かどうかわからないが、俺の知っている沖縄系の飲み屋が二二二、三年で三軒も店を閉めた。ケニカは派手にやる。暴力沙汰が多い。アルコールで肝臓をやらめた、ウチナンチュー

も随分と見た。とにかくよく酒を飲む。酒盛できたんたせい酒に強い。空手のヤカン所だからケニカも強い。

とまあ何か悪いことばかりが、今まで目についた。

「寄せ場と民族」なんでシリーズに沖縄をとりあげるのは場違いだと思われる人も多いだろう。しかし、実際には言葉の違い——方言なんというのとは大違い——や生活、文化の違いから、日本人——ヤマトンチューから異民族扱い

され、差別されて続けてきたことは間違いない事実だ。

「ウチナンチュー」自身が、自分たちを独立した民族と呼ぶかどうかは詳しく知らないが、江戸時代に、薩摩藩の武力侵略によって支配下におかれるまでは、「琉球王朝」という独立した国だったようだ。

だから、明治中期に、今の新世界になっている所で開かれた「勸業博覧会」に、アイヌ、朝鮮人、中国人、と並んで見せ物にされ、差別されていた。

太平洋戦争末期の沖縄戦では、多くの「ウチナンチュー」が「日本軍」の「盾」にされた。過激な飲酒、暴力のナゾもある程度理解されて殺されていったが、これは他の地では見

当らない。摩文仁ヶ丘に行けば、「〇〇県戦死者慰霊碑」とかいふのがワニサカあるが、それ

は皆軍人の碑であって、民間人ではない。沖縄では、その「日本軍」を守るため、民間人が利用され、女、子供たちが大量に殺された。戦後も、沖縄だけは「本土軍」の支配下におかれ、「ウチナンチュー」が「本土」の来るのを許す可制であった。

こうした差別の中で、いかに「人間」が歪められていくのを、最近読んだ金城実さんの本、「土の笑い——オキナワへ、オキナワから——」

筑摩書房刊で教えられた。そして冒頭に書いてあるように、過激な飲酒、暴力のナゾもある程度理解されて殺されていった。これは他の地では見

少し長くなるが、金城さんの本から引用させてもらおう。

「ヤマトでたえずおびえて生きてきた。食堂にとびこんでざるそばを注文したのはよいが、ざるの底にはちゃんと受ける柄があるとおもひ、上からタレをぶっかけるとテーブルからしゅうゆが流れおちる。赤面してすみずみ逃げ出し、もどって銭をほうるように払って一目散に走った。」

道を問うには言葉におびえた。東京そばを話すもどかしさのため黙々と時間をかけて行き先を探したものだ。このような自閉症的な精神状態は必ずどこかで爆発を起す。酒を飲むことをおぼえ、飲むと押さえつけられ

ていたものがはじけとんだ。

このようにして、日本人になりきることと沖縄人であることに、ほとんどの青年たちが押しつぶされるのだ。

そして彼は飲みまくり、暴れまわっていた。金でよく見かける「ウチナンチュー」と何と似ているのか。言葉を表わせない怒りを酒にたより、暴力で表現することは決して悔いしたことではないが、それしか買つけえぬ人々に、ただ押さえつけつぶしにかかるだけでは何も解決しえない。

先号で書いた「朝鮮」の場合と違って、差別に対してヤケクソになり、酒を飲んで暴れるといった点でアイヌとよく似ている。

それはやはり、朝鮮は分裂させられていて

も、一つの独立した国家をもちつづけており、在日朝鮮人はこのことを支えに、日本人なんかと負けたまふかと頑張っているのになら、日本人になりきろうとして、なりきれたにせよ、ミミミみたいなものが、ヤマトヤシヤモに反抗して、金儲けしてやろうといった風に割り切れないのではないのか。

事実、「ウチナンチュー」は口をきくのがヘタな（金城さんの言葉）で、貧乏人が多いし、「アイヌ」も口をきくのがヘタな（金城さんの言葉）で、貧乏人が多い。これ又貧乏人が多い。

釜の中でも、朝鮮人の店は何とか頑張っているのに、ウチナンチューの店は次々と閉め

ていつてる。

金城さんは、差別に対して沖縄言葉も復権させ、沖縄人としての誇りを取りもどすことを主張している。それはまったくのとおりだ。思うが、日本の中でそれをやり抜くことにより、たまたま貧しくなっても、いかに豊かな民族として独立し、経済的には豊かでも、精神的には腐り切った日本からオサラバすることを勧めたい。

(アミニラ)